

意思決定支援の難しさ

(1) 事例提出理由：ワーカーがこの事例を検討したいと思った理由

本人の希望、家族の希望、本人の一番近くにいた妻の希望に相違があり、方針検討をするには誰を中心にどのような関わり方で進めていけばよいか迷った事例であるため、誰をクライアントとし、どのように相談を進めたらよかったのかを検討したいと思った。

(2) ワーカーが把握しているクライアントの状況

クライアント名	Aさん	年齢	80歳代	性別	男性
ワーカーの関わりのきっかけ(紹介経路)	ネフローゼ症候群で入院。すぐにでも透析が必要な病状だったが本人は透析を望まない様子。家族は透析導入に迷いがあるため、透析医療費助成や透析をした際の退院先の情報提供をしてほしいと医師から依頼があった。			援助期間	1ヵ月
クライアントの要望(困っていること)	<ul style="list-style-type: none"> ・これ以上家族に迷惑をかけたくない。 ・家族に迷惑をかけるくらいなら透析はしたくないが、透析をしないとも決めきれない。 ・家に帰ることで家族に負担がかかるため、自宅退院はしたくない。有料老人ホームに行きたい。 				

(家族情報)

同居	(続柄・年齢・就業など) 妻：80代、本人と一緒に金物屋を営んでいる。
別居	(同上) <ul style="list-style-type: none"> ・長女：50代、金物屋を手伝っている。 ・次女：50代 ・孫1(長女娘)：20代。デイケアで勤務。 ・孫2(長女娘)：20代。就労あり。

診断名・既往歴等の医療情報	胃ポリープ摘出 高血圧 糖尿病
---------------	-----------------------

(上記の医療・疾病など以外のクライアントに関する基本情報)

【入院前】

日常生活動作自立。膝が悪く要支援1を取得していたが介護サービスの利用はなし。60年以上、建築金物のお店を営んでいる。仕事とお酒が生きがいとなっていた。日曜・祝日がお休みだが依頼があれば仕事をしていた。妻からは早く仕事を辞めろと言われて

ていたが続けていた。

【住宅環境】

3階建てのビルのような造り。地下1階～地上2階はお店。
主な生活スペースは3階。

(3) 初回面接要約（初回面接に相当する話し合い、出会いの要約とその際のワーカーの感じたこと・考えたことなどを特記事項に書いてください）

同席者	長女、次女、妻、孫2人、担当理学療法士（以下「PT」という）	
初回面接の要約		特記事項（ワーカーのコメント）
家族は本人から寝たきりになってしまったと聞いていたため、退院後には家族がつきっきりで介護をしなければいけないと考えていた。 そのため寝たきりになってまで透析を続けるのが正しい選択なのか家族の中でも決めきれずにいた。 本人の実際と家族の認識に乖離があるため、担当PTよりリハビリ評価を家族に説明した。 PTからの説明、リモートでの本人との面会を行い本人の現状は理解された。また、医療ソーシャルワーカー（以下「MSW」という）より透析医療費助成制度透析になった場合の療養先、介護保険について説明し、家族だけですべてを担わなくても良いことを説明した。 長女、次女、孫2人は想像よりも元気な本人を見て、透析をしてほしいと考えたが、妻は透析を望んでいない様子。本日の説明を踏まえて、今後どうするか早めに検討していただくこととした。		本人の現状と家族の認識に乖離がある。リハビリ評価を伝え、現状を理解してもらわないと本人に適した治療方針や療養先検討ができない。 また、介護サービスの利用を考えていないようであり、使える社会資源を説明したほうがよさそう。

(4) 初回面接などを基にした、ワーカーが考える本ケースにおける問題点と援助の方向性（暫定的アセスメント、支援計画：何がクライアントにとって問題なのか、ワーカーは何をしていかなければならないと考えたのか、を記入してください）

本ケースは当初、本人の現状と家族の認識に乖離があり、現実的な方針検討にならない可能性が高いことが問題だと考えた。そのため担当リハビリスタッフからの説明とリモート面会を行い、本人の状態の理解を促した。
その上での問題点は、本人の本心と妻、家族の意向に相違があること。
治療については本人、家族は透析を行いたいという意思が感じられるが、妻は透析導入に否定的。そして本人は妻を第一に考えており、透析導入に後ろ向きになっている。
療養先については、家族全員、もともとの自宅は困難（特に妻は絶対無理）と考えており、長女は長女宅への退院を希望しているが、本人は家族に迷惑をかけたくない気持ちが強く、施設入所を希望している。
そのため、治療方針については本人の現状を理解したうえで、再度家族と本人で相談してもらい必要がある。
療養先については、本人の意向と家族の考えを双方に共有し、長女宅か施設か相談する機会を改めて作る必要がある。

(5) 援助経過（援助の転機ごとに記入）

年月	要約
○年△月□日	本人と面談し、本人の考え、意向を確認。
○年△月□日+5日	家族と初回面談。
○年△月□日+10日	医師に面談報告、治療方針を確認。→確認の結果、腎機能の改善あり、透析導入は不要となった。
○年△月□日+13日	透析不要となったため改めて本人の意向を確認。→以前は迷いがあったが、家族に迷惑をかけたくないため施設入所希望と明確になった。
○年△月□日+20日	長女と再面談。本人の性格を鑑み、有料老人ホームへの入所の方針となった。

(6) 気づきと省察

患者本人と家族それぞれの考えに相違があり、家族システムにどのように働きかけたらよかったのか非常に悩んだケースだった。介入当初は本人の現状と家族の認識が大きく乖離しており、本人状況を家族が理解することで方針検討ができると考えていた。しかし実際は本人と一緒に過ごしてきた家族のそれぞれの思いと本人の家族に対する思いがあり、本人の状況を知ったからと言って方針が一致するわけではなかった。本人の治療に対しての意向と本人の家族に対する思いが拮抗しているように感じられた。MSWとしては本人が妻を第一に考えていることは感じられたが、妻と本人がこれまでどのように生活し、どのように決断してきたのかに焦点を当てて考えることができなかった。今回のような課題に直面した際に、本人と家族はどのように乗り越えてきたのか、どのような将来を考えていたのかに焦点を当て、それぞれの家族の役割や考え方に寄り添った支援をすることがMSWの専門性なのだと思えることができた。

(7) グループスーパービジョンを受けて感じたこと及びまとめ

グループスーパービジョンの中で事例検討をし、スーパーバイザー（以下「SVR」という）やメンバーからは本人と家族の関係性に関する質問が多く挙がった。私自身の考え方を振り返ってみると、本人や家族を個別にみており、それぞれが互いにどのような関係性にあるのかを知ろうという意識が薄かった。このように自分だけでは気が付けない視点やクライアントとの関わり方をSVR始め、様々な病院機能や地域から集まったMSWから意見を聴き気づくことができたことは自身の学びに大きく繋がった。

不全感の残る事例であったが、SVRやメンバーの共感や温かいアドバイスは大変励みになった。月1回、環境は違うものの同じようにクライアントを支援している仲間と学び、時には労いながら様々な事例検討を行えたことは、職場とは違った成長の場になったと感じた。